

# 清水港テルファー

静岡県静岡市

清水といえばマグロ、桜エビ、しらす。今でこそ新鮮な海の幸を堪能できる港町として国内外の多くの観光客に知られているが、大正から昭和にかけて実は清水港は木材輸入の要港だった。昭和30年代に作曲されたその名も「清水港木材音頭」の冒頭では「清水港へアメリカ ソレン 運ぶ丸太は折戸の海でーネ おなじ浮寝のおなじ浮寝の浪枕」と歌われている。海外から集積した木材を港に陸揚げした施設がこのテルファーだ。完成は1928(昭和3)年。真上から見ると「コ」の字型になっており、木材は海上に突き出たその二つの端点から電動捲揚装置で揚重され、かつて敷設されていた国鉄臨港線の清水港駅に引き込まれた貨車へ直接積載された。従前は沖合から筏に組んで運んできた木材をコンベヤーで貨車に積み込まれていたがその処理能力は一日に一車両程度。このテルファーにより効率は劇的に向上し、わずか50分足らずで30t積みの貨車を満載にしたという。最大吊揚重は3t。レールは地上面から8mあまり、総延長は200m近くに達する。

1971(昭和46)年にその役割を終えたが、2000年に国の登録有形文化財に指定された。ほぼ百年前に整備された無骨な荷役施設である。古びてはいるがこの存在感はどうだろう。この一枚を押さえたカメラマンの背中側には近代的なショッピングセンターや映画館、観覧車を擁する複合施設が控える。恋人たちが食事を楽しみ、愛犬を連れた親子の朗らかな声が響いていた。11月から始まるイルミネーションイベントは市民が心待ちにする毎年恒例の催事だという。散策していた男性が「ライトアップは今年もきつと賑わうだろうね」と教えてくれた。その自慢気な笑顔からこの施設に対する愛着が伝わってくる。清水港テルファーは紛うことなく清水港のシンボルとしてウォーターフロントの景観に融合していた。

こうした港湾遺産の役割の果たし方もある。



テルファーには運転室がつき、オペレーターの指令で接岸する貨物船の積荷を直接吊り上げ、レールを移動し貨物列車に降ろす仕組みになっている。役目を終えた今もなお、水運と陸運をつないだ主要施設の姿を今に伝えている(出典:『清水港開港100年史』)

